

I 研究主題

中学校特別支援学級における生徒の ICT 活用の困難さを克服するために
～ 自立活動の時間で学んだことを維持するために ～

倉敷市立児島中学校 教諭 藤田 麻美

II 研究の目的

昨年度の実践研究では、ICT 活用に関する特別支援学級の現状や課題を明らかにし、特別支援学級在籍生徒の ICT 活用の困難さを克服するために、置籍校の知的障害特別支援学級において、自立活動の時間に実践授業を行い、その指導・支援について検討することを目的とした。その結果、自己選択の場を設けることで自分に合う方法で意欲的に活動することができたこと、自立活動を小集団で行うことで生徒同士が互いにモデルとなり日常での実践につながったことの効果が推測された。一方で、自立活動で学んだことを使う場を教師が意図的に設定することや生徒の ICT 活用の頻度を高めること等の課題があった。

そこで今年度は、昨年度の効果や課題を踏まえ、生徒が ICT 活用の困難さを克服するために、特別支援学級担任(以下支援担任)と連携し、意図的に学んだことを使う場を設定したり、ICT 活用の頻度を高めたりする実践を行った。

III 研究の方法

知的障害特別支援学級在籍生徒(1年4名)に対し、実践授業前にアンケート、及びアセスメントを行い、ICT 活用の困難さを克服するための実践授業を、筆者を T1、支援担任を T2 として自立活動の時間に4回実施した。実践後に支援担任に協力してもらい、生徒の毎日の生活について振り返る時間を2週間とってもらった。実施直後、及び1ヶ月後に追跡アンケートを実施し、生徒の変容を調べた。また、支援担任、授業担当教員、養護教諭(GT)に聞き取り調査を行った。アンケートについては、各授業に関連する設問と、ICT 活用の際の困ったときの対処法等についての設問とした。

IV 結果及び考察

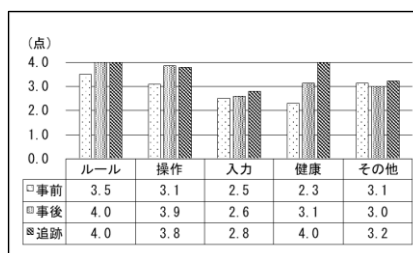
昨年度同様、ルール、操作、入力、健康に関する4回の授業を行った。以下、ルールと健康について示す。

「ルールを守ろう」(1/4 時)

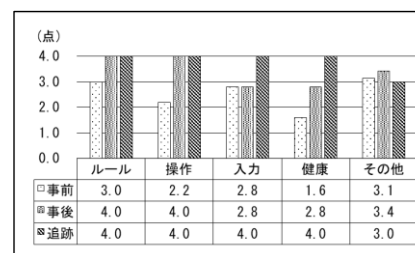
生徒が普段からルールや決まりを意識しているため、タブレットの使い方のロールプレイにすぐに反応し、間違った使い方を指摘していた。また、パスワードの扱い方についても、生徒自身が自分の意見を周りの人に伝えることができていた。学んだことを確認・維持するため、ルールを教室に掲示した。他の授業でも生徒がお互いにルールを守るように呼びかける姿が見られた。

「健康に気をつけて使おう」(4/4 時)

養護教諭をゲストティーチャーとし、目を休ませる方法やストレッチについて学んだ。頭の重さをお米を使って体感したり、ストレートネックかどうかをタブレットで写真を撮って調べたりすることで、生徒が自分のこととして捉え、授業に臨むことができた。学んだことを維持する



【図1 学級全体の変容】



【図2 対象生徒の変容】

ために、ストレッチの方法を教室に掲示した。また、授業後に毎日の生活習慣や学んだことができているかの朝の会、帰りの会で振り返る時間を2週間取った。1ヶ月後の追跡アンケートより学んだことを継続していることが推測される(図1、2)。

V 今後の課題

当該特別支援学級に、タブレットをうまく使うことができない生徒や、音声入力や手書き入力がうまくできない生徒がいた。その生徒に合った別の入力方法を模索していく必要があると考える。

今回、様々な教員と連携しながら実践授業を進めていったが、交流学級担任とまでは至らなかった。生徒が自信をもって交流学級でもタブレットを操作できるように、交流学級担任と計画的に進めていく必要がある。また、教師によって様々な学習支援システムやアプリケーションソフトを使っている。生徒の ICT 活用の頻度を高めるために、校内で ICT 活用の情報共有を行い、教師が少しでも授業の中で生徒と共に ICT を活用する必要がある。